



算盤組立職人

Vol.07 新聞掲載

「で、新人職人さんは何を喋るんだ？」
「まだ修行を始めたばかりだから現時点で思うことかなー」
作り初めてまだ2ヶ月しか経過してないのだから。たったそれだけで何がわかるというのだろう。いや、そんな期待は端からしていないのではないかな。市の施策をアピールしたいがための、ってやつか。
「まあ色々と思うことはあるけど無理しない程度にがんばれな」
「自分にできる範囲でしかやらないから大丈夫だよ、佐藤くん」
あ、そうだ、そうやって彼は生きてきたんだ。それはまたの機会に、語ろうと思う。

「佐藤くん、新聞に載ることになったよー」
「お前が？ マジか！？」
喋るのが苦手なのにどうやって受け答えしたんだ？
「平和に取材を終えることができたよ」
「それってアレか、例の『役者になる』みたいな？」
「そうそう」
「中々に便利なテクニクだな。俺にもできるかな？」

「できると思うよー。自分を俯瞰して、シチュエーションを理解して、頭の中で何パターンかセリフを書いて、周りの人にパターン分岐でしゃべらせて、…」
「…あー、俺には無理だわ」
思考が複雑過ぎる。それだけ考えられるなら別の仕事でもバリバリできるのではないのかと思う。
「…というわけなのだよ、佐藤くん」
「やっぱりお前はすげーな。」
「うーん、どうしようもなくなってきた、苦肉の策ってところかな。」
それで何とかなってしまうのがすごいというのだから。
「何日かしたら載るらしいので、気が向いたら読んでみてくれな。」
「わかった、期待してるよ。」

数日後、地方欄ではあるがそれなり大きな記事で掲載されていた。
「佐藤くんー、新聞載ったよー」
そう言いながら両手で新聞を抱えてやって来た。
「なんだ、その量の新聞は！」
「ほら、各所に配らなきゃならないじゃないか。」
そんなに配るところがあるのか？、というツツコミはまあ置いておこう。

「初めて載ったんだから一部は手元に置いといたらどうだ？」
「そりゃーもちろん置いとくよ。読む用、保存用、布教用！」
昔からマニアックなところがあつたけど、現在だな。
「さて、佐藤くん。」
「おいおい次は何だね、浜村淳さん！（笑）」



profile 高山辰則(龍雲)

2014年より、伝統工芸士/宮本一廣氏のもとで修業。

2015年に播州小野算盤工房shinを立ち上げる。

「全ての人ではなく、できるだけ多くの人に気に入ってもらえる商品を作れ」という師の言葉を継承し、伝統的工芸品づ

くりを通じて、その歴史や技術を後世に伝えるために日々努力をしています。

播州小野算盤工房shin / 高山辰則(龍雲)

<https://tkymtatz.wixsite.com/abacus>